

科目名	持続性学特論	配当年次	1	単位数	2
科目区分	環境経営科目群（研究科共通）	履修区分	選択必修		
教員名	荒田 鉄二	開講区分	前期		
授業の概要	<p>キーワード：人工生態系、持続性、環境政策の公準</p> <p>人工生態系と自然生態系が永続的に共存する状態を持続可能な状態と捉え、自然生態系の機能と持続性の根源、地球システム内における人工生態系の熱力学的位置づけ、「強い持続性」および「弱い持続性」等の持続性の諸概念、持続性の評価指標、持続可能な発展の促進方策について学ぶ。</p>				
到達目標 (ルーブリック評価項目)	<ol style="list-style-type: none"> 人工生態系としての人間社会が持続するために必要な条件を理解する。 持続可能な方向に社会を誘導するための環境政策の公準を理解する。 				
授業計画	<ol style="list-style-type: none"> 持続可能な発展に関する現代思想の様相 経済理論と持続可能な発展 定常状態の経済への移行 最適規模の環境マクロ経済学 消費：付加価値、物理的変換および福祉 政策の運用と持続可能な発展 自然資本への投資 環境的に持続可能な発展の促進方策 国民勘定と持続可能な発展 持続可能な国民純生産の尺度 持続可能な発展と国民経済計算 人口と持続可能な発展 国際貿易と持続可能な発展 自由貿易とグローバル化 vs 環境と共同体 調整から持続可能な発展へ 				
評価方法	講義で説明した内容の理解の程度、基礎的知識を正しく理解しているかどうか重点をおく。ルーブリック（30%）、小レポート（30%）、期末ポート（40%）				
講義外での学習	教科書を事前によく読んでくること。担当の回のレジュメを作成すること。				
履修上の注意事項	毎回必ず教科書を持参すること。 ※先修科目：なし				
教材	<p>◆教科書： 持続可能な発展の経済学（ハーマン・デイリー、みすず書房、ISBN4-622-07174-6）</p> <p>◆参考書： エントロピー法則と経済過程（N. ジョージエスクーレーゲン、みすず書房、ISBN4-622-03791-2）</p>				

科目名	地域計画学特論	配当年次	1	単位数	2
科目区分	環境経営科目群 (研究科共通)	履修区分	選択必修		
教員名	山口 創	開講区分	後期		
授業の概要	<p>キーワード：地域計画、地域資源管理、内発的発展</p> <p>本講義では、地域計画の基礎ならびに、地域の持続的な発展を支える現代的な地域資源の利用、管理の在り方について講義する。地域計画学、地域資源管理学に関する文献の輪読や具体的事例を通して、土地利用、水資源の利用、環境保全の基礎について学ぶ。また、各自が関心を持つ地域課題を対象に論文レビューをおこない、その問題の構造や解決に向けた方策について議論する。</p>				
到達目標 (ループリック 評価項目)	<p>1. 我が国の地域計画体系および地域計画研究の動向について理解する。 2. 地域が抱える問題の構造や課題解決の方策について考える基礎を身に付ける。</p>				
授業計画	<p>1. オリエンテーション</p> <p>2. ～5. 地域計画学に関連する文献の輪読をおこない、地域計画の基礎を身につける。 具体的には、現在の地域社会が抱える課題を概観し、空間・環境・景観計画、社会・コミュニティ計画、経済計画の内容と方法について学ぶ。また、ヨーロッパを中心に海外における地域計画についても概観する。 輪読に用いる文献は、農村計画学（千賀祐太郎編著）、改定農村計画学（改定農村計画学会編集委員会編 農業土木学会）を予定している。</p> <p>6. ～10. 地域資源管理に関連する文献の輪読をおこない、現代的な地域資源の利用、管理の在り方について学ぶ。 具体的には、土地利用、水資源の利用、自然資源の保全、文化・伝統や地域固有知識の継承の実態と管理の方策について学ぶ。また、地域資源を活用したコミュニティビジネスの創出など地域活性化との関連についても学ぶ。 輪読に用いる文献は、地域資源管理学（目瀬守男編著）、農山村再生の実践（小田切徳美編著 農山漁村文化協会）を予定している。</p> <p>11. ～15. 各自が関心をもつテーマを選び、論文レビューをおこなう。レビューの内容は授業内で発表し、問題の構造や今後必要とされる施策について議論する。</p>				
評価方法	<p>講義で説明した内容や輪読する文献の内容を正しく理解できているかを重視する。 ループリック 50%、授業における発表（輪読担当、論文レビュー）50%で評価。</p>				
講義外での 学習	<p>事前学習として、輪読部分の読み込みが必要。また、毎回の授業では、担当者に輪読部分もしくは課題論文の発表を課す。</p>				
履修上の 注意事項					
教材	<p>◆教科書：農村計画学（千賀祐太郎編著 朝倉書店）、改定農村計画学（改定農村計画学会編集委員会編 農業土木学会）、地域資源管理学（目瀬守男編著 明文書房）、農山村再生の実践（小田切徳美編著 農山漁村文化協会）など。 ◆参考書：講義中に紹介する。</p>				

科目名	人間環境システム論	配当年次	2	単位数	2
科目区分	環境経営科目群 (研究科共通)	履修区分	選択必修		
教員名	石井 克典	開講区分	前期		
授業の概要	<p>キーワード：人間情報処理 環境心理 環境知覚</p> <p>人間は自らを取り巻くあらゆる環境との相互作用によって社会的営みを行っている。人間環境システム論では、生物・地球・宇宙などから成る自然系システムに限らず、モノ・情報・社会などから成る人工系システムも含め幅広い視点から人間中心の環境を考える。本講義では環境情報が持つ入力・処理・蓄積・出力・流通の構造を講述することに主眼をおき、環境を系統的に理解して持続可能な社会をデザインすることを目標とする。さらに、人間の生体・感情などの情報を可視化する技術について触れ、人間の身体・認知・心理などの特性に適合するような環境適応システムの実現について議論する。講義の進度に応じて適宜研究課題に取り組み、理解を深化させる。</p>				
到達目標 (ルーブリック評価項目)	<ol style="list-style-type: none"> 1. 自らの研究テーマを系統的な観点から俯瞰できる理解力を身につける。 2. 人間感性や環境心理に基づく実践的な環境総合デザイン力を身につける。 				
授業計画	<ol style="list-style-type: none"> 1. オリエンテーション, 人間情報処理機能と環境【テキストA】 2. 視聴覚環境と人間工学【テキストA】 3. 生体信号による環境評価【テキストA】 4. 感性の情報化と多変量解析【テキストB】 5. 感性とデザイン【テキストB】 6. 環境知覚と環境認知【テキストC】 7. 環境評価と査定【テキストC】 8. パーソナリティと環境【テキストC】 9. パーソナルスペースとテリトリアリティ【テキストC】 10. クラウディングとプライバシー【テキストC】 11. 住居・都市の環境心理【テキストC】 12. 教育・オフィスの環境心理【テキストC】 13. 自然・天然資源管理の環境心理【テキストC】 14. 受講者による調査研究 15. 発表・討議 				
評価方法	<p>議論に対する姿勢や理解度などにより評価する。進度に応じて、レポートや演習課題による理解度の確認を行うこともある。</p> <p>ルーブリック (40%)、課題レポート (30%)、毎回の演習課題 (30%)</p> <p>※ルーブリック評価：到達目標に関する理解度、授業参加態度・修学意欲</p>				
講義外での学習	<p>講義中に実施する演習課題を確実に解けるよう復習を行い、講義内容の理解を深めるようにすること。</p>				
履修上の注意事項	<p>PC を用いて Excel, R などを用いた分析の演習をするので、時間外においても講義内容の復習や習熟に努め、不明な点は教員に積極的に質問することが望ましい。</p> <p>「パソコン利用必須」</p>				
教材	<p>◆教科書：A) 福田忠彦：生体情報システム論，産業図書，ISBN4-7828-5303-3 B) 井口征士他：感性情報処理，オーム社，ISBN4-274-07774-8 C) R. ギフォード：環境心理学（上）（下），北大路書房， ISBN978-4-7628-2448-7 ISBN978-4-7628-2564-4</p> <p>◆参考書：ヤコブ・ニールセン：ユーザビリティエンジニアリング原論，東京電機大学出版局，ISBN4-501-53200-9</p> <p>教科書・参考書は石井研究室蔵書であるため、受講者は必ずしも購入する必要はない。</p>				

科目名	環境経済特論	配当年次	1	単位数	2
科目区分	環境経営科目群 (研究科共通)	履修区分	選択必修		
教員名	石川 真澄	開講区分	後期		
授業の概要	<p>キーワード：市場の失敗、社会的費用、経済的手法による環境政策</p> <p>持続可能な社会の実現のためには、健全な環境を前提とした市場経済の構築が不可欠である。本講義では、環境問題を市場における経済活動との関連で理解し、標準的な経済理論の概念を用いて相互の関係を分析するとともに、持続可能な市場経済に求められる諸条件について考究する。また、市場の経済活動による環境への負荷を制御するために実施される各種の政策手法による、市場経済への効果や副次的な影響を分析し、比較・検討を行う。</p>				
到達目標 (ルーブリック評価項目)	<p>標準的な経済理論に基づき、環境問題の経済学的構造を理解する 資源・環境管理政策と市場メカニズムの関連性を理解する 実際の環境問題や環境政策について環境経済学の知見を利用した議論ができる</p>				
授業計画	<ol style="list-style-type: none"> 1. イントロダクション 環境と経済との関係 1 2. 環境と経済との関係 2 3. 公共財としての環境 4. 環境問題と外部不経済 5. コースの定理と自主協定 6. 環境問題と権利および制度的側面 1 7. 環境問題と権利および制度的側面 2 8. 再生可能資源 1 9. 再生可能資源 2 10. 再生不可能性資源 1 11. 再生不可能性資源 2 12. 環境税 1 13. 環境税 2 14. 排出取引制度 1 15. 排出取引制度 2 				
評価方法	<p>コースでの学習内容の理解や貢献度、課題の成績等を総合し、ルーブリック（40%）と、期末に実施するレポート（60%）により評価する。</p>				
講義外での学習	<p>教材に関する学習のほか、関連する文献について事前・事後の学習を求める場合がある。また、本科目の前提となる基礎的な経済学が未修の場合、各自での学習が必要である。</p>				
履修上の注意事項	<p>標準的な経済理論に基づく学部中上級レベルの環境経済学のテキストを講読するとともに、重要なトピックについては、関連する学術論文についても取り扱う。トピックとしては学部の同名の講義と類似しているが、学問的水準は異なる。また、受講者の学習歴や研究内容によっては、協議の上、上記内容の一部を変更することもあるので留意されたい。</p>				
教材	<p>◆教科書：別途指示する</p> <p>◆参考書：細田・横山 「環境経済学」 有斐閣</p>				

科目名	環境評価特論	配当年次	1	単位数	2
科目区分	環境経営科目群 (研究科共通)	履修区分	選択必修		
教員名	高井 亨	開講区分	後期		
授業の概要	<p>キーワード： 環境、指標、経済評価</p> <p>環境は人間および社会を成り立たせる基盤として、最も重要な役割を果たしている。人間にとっての持続可能な社会を構築するためには我々を取り巻く環境の状態を把握することが重要である。そして環境を適切に維持してゆくためにはその経済的価値を知っていると有益な場合がある（もちろんその価値は、本質的には無限に大きいはずである）。そこで本講義では、環境の状態を把握する方法として持続可能性指標を紹介する（前半）。また、環境の価値を把握する方法として、経済学や土木・環境工学において開発されてきた経済評価手法について紹介する（後半）。講義は、教科書・論文の輪読を中心に進める。受講者自らが関心をもつ「環境」について、実際に評価を実施できるようになることが最終目的である。</p>				
到達目標 (ルーブリック評価項目)	<ul style="list-style-type: none"> ・環境の多様な状態を、適切な指標によって把握する方法を理解する ・環境評価手法を理解する ・実際に環境評価を行うことができる 				
授業計画	<ol style="list-style-type: none"> 1. イントロダクション <p>環境指標パート</p> <ol style="list-style-type: none"> 2. 持続可能な発展とその多様な目標 3. 持続可能性を測る ①：エコロジカル・フットプリント、プラネタリー・バウンダリー 4. 持続可能性を測る ②：環境効率指標・デカップリング指標 5. 持続可能性を測る ③：人間開発指標・包括的富指標 6. 持続可能性を測る ④：複合指標（統合指標） 7. 環境指標に関する論文紹介 <p>環境価値評価パート</p> <ol style="list-style-type: none"> 8. 環境の価値評価の基礎理論 9. 環境の価値評価①：トラベルコスト法 10. 環境の価値評価②：ヘドニック法 11. 環境の価値評価③：CVM 12. 環境の価値評価④：コンジョイント分析 <p>事例研究（受講生による事例報告・評価実施例報告）</p> <ol style="list-style-type: none"> 13. 報告① 14. 報告② 15. 討論 				
評価方法	ルーブリック（15%）、受講態度（15%）、担当回のレジュメ内容（50%）、事例研究報告（20%）の割合で評価する。				
講義外での学習	環境に関する様々なニュースに触れる。				
履修上の注意事項	本講義では教科書の輪読や論文購読が中心となるため、予習・レジュメ作成が必要となる。				
教材	<p>◆教科書：特に定めない（必要な資料は配布する）</p> <p>◆参考書：環境経済評価の実務、大野栄治編著、勁草書房</p>				

科目名	環境経営特論	配当年次	1	単位数	2
科目区分	環境経営科目群 (研究科共通)	履修区分	選択必修		
教員名	中尾 悠利子	開講区分	前期		
授業の概要	<p>キーワード：環境報告，環境会計，自然資本</p> <p>わが国では、企業経営のあらゆる側面に環境への配慮を織り込む「環境経営」が90年代後半から普及し、企業現場で環境問題と経済の両立を目指す様々な取り組みが進められている。本講義では、環境経営分野の環境報告書やCSR報告書に関するレポートの理論や枠組み、企業事例に関して学ぶ。指定テキストを用いた輪読及び講義参加者による発表と討議を行う。なお、指定のテキストについては、修士論文作成に際して、環境経営の分野に関する文献購読力が身につく外国語文献を主な対象として取り上げる。</p>				
到達目標 (ルーブリック評価項目)	<p>① 企業等の環境・社会問題への取り組みの実態を知り、それらの背景となる概念や原則を理解する。</p> <p>② 環境経営、サステナビリティ経営の具体的な手法を理解する。</p> <p>③ 複雑化し、グローバル化する現代社会において、企業はいかにして環境経営、サステナビリティ経営に取り組むべきかについて自分の言葉で説明できる力を身につける。</p>				
授業計画	<ul style="list-style-type: none"> ● 第1回 イン트로ダクション：講義の進め方、成績評価、輪読方法、発表担当章、発表日の割り当て等の説明を行います。 ● 第2回～第4回：<i>Accounting for Sustainability: Practical Insights</i> の輪読（第1章から第3章）（第1回に担当章を割り振るのでレジュメを作成して、発表にのぞんでください。） Introduction, 2. The Prince's Accounting for Sustainability Project: Creating 21st Century Decision-Making and Reporting Systems to Respond to 21st Century Challenges and Opportunities, 3. Sainsbury's: Embedding Sustainability in the Supermarket Supply Chain ● 第5回～第7回：<i>Accounting for Sustainability: Practical Insights</i> の輪読（第4章から第6章） 4. Using the Connected Reporting Framework as a Driver of Change within EDF Energy, 5. A Golden Thread for Embedding Sustainability in a Local Government Context, 6. Building from the Bottom, Inspired from the Top: Accounting for Sustainability and the Environment Agency ● 第8回～第10回：<i>Accounting for Sustainability: Practical Insights</i> の輪読（第7章から第9章） 7. Evolution of Risk, Opportunity and the Business Case in Embedding Connected Reporting at BT, 8. Sustainability and Organizational Connectivity at HSBC, 9. 'One Aviva, Twice the Value': Connecting Sustainability at Aviva PLC ● 第11回～第13回：<i>Corporate Social Disclosure Critical Perspectives in China and Japan</i> の輪読 (Page1-86) ● 第14回～第15回：<i>Corporate Social Disclosure Critical Perspectives in China and Japan</i> の輪読 (Pages 236-282) 				
評価方法	毎回の講義時の発表資料（100%）なお、発表資料の評価基準は（1）文献（教科書）内容理解度、（2）考察力、（3）論述力、（4）作成努力。				
講義外での学習	毎回の予習，復習。				
履修上の注意事項	講義形式ではなく，議論形式になります。予習を前提としています。				
教材	<p>A. Hopwood, and J. Unerman, J. Fries., <i>Accounting for Sustainability: Practical Insights</i>, Routledge, 2010.</p> <p>C. Noronha, <i>Corporate Social Disclosure Critical Perspectives in China and Japan</i>, The Palgrave Macmillan Asian Business Series, 2014.</p>				

科目名	植物生態学特論	配当年次	2	単位数	2
科目区分	自然環境科目群	履修区分	選択		
教員名	笠木 哲也	開講区分	前期		
授業の概要	<p>キーワード：進化、生物間相互作用、送粉系</p> <p>植物は地球上で生態系の基盤を形成する。植物の生態を理解することは、生態系や自然環境保全を考えるためにも非常に重要である。</p> <p>本講義では、植物の形態や生理特性、進化、地理分布について解説する。さらに、植物の繁殖特性について、性表現、送粉、種子散布について解説する。</p>				
到達目標 (ルーブリック評価項目)	<ul style="list-style-type: none"> ・植物の基本的な分類を理解する。 ・植物の多様性を理解する。 ・植物の生活史特性、繁殖特性を理解する。 ・生態系の基盤を形成する植物の保全を考察できるようにする。 				
授業計画	<ol style="list-style-type: none"> 1. 植物の形態と分類 2. 植物の進化 3. 植物の分布 4. 光合成の生態学 5. 光合成と植物の形態 6. 植物の生活史進化 7. 植物の個体群動態 8. 植物の群集生態学 9. 植物の共存機構と種多様性 10. 植物の性表現 11. 植物の繁殖生態 (1) 12. 植物の繁殖生態 (2) 13. 送粉 (1) 14. 送粉 (2) 15. 種子散布 				
評価方法	<p>講義中に実施する課題 (10%)、レポート (70%)、ルーブリック (20%)</p> <p>※ルーブリック評価：到達目標に関する理解度、授業参加態度・修学意欲</p>				
講義外での学習	植物や生態系保全に関連する論文や専門書を読む。				
履修上の注意事項	※先修科目：履修にあたって、基礎生物学について学んでおくことが望ましい。				
教材	<p>◆教科書：なし 資料を配布する。</p> <p>◆参考書：講義の中で紹介する。</p>				

科目名	行動生態学特論	配当年次	1	単位数	2
科目区分	自然環境科目群	履修区分	選択		
教員名	小林 朋道	開講区分	前期		
授業の概要	<p><u>キーワード：行動、遺伝子、進化的適応</u></p> <p>現在、動物の行動や生態を理解する上で必要となる見方は、「遺伝子の変化を伴う進化の産物」という見方である。本講義では、各々の動物種が、その種本来の生息環境で示す行動や生態が、遺伝子の伝承や拡散にどのように有利に作用するかという視点から、餌の獲得、捕食者からの回避、繁殖行動について、仮説の立て方と検証法などを交え解説する。</p>				
到達目標 (ルーブリック評価項目)	動物の行動の進化的変化の方向を決める要因についての統一理論としての利己的遺伝説を理解し、また、その理論が、人間が生み出した環境問題への対策にどのような示唆を与えるのかについての考え方を理解する。				
授業計画	<ol style="list-style-type: none"> 1. 自然淘汰・生態および行動Ⅰ 2. 自然淘汰・生態および行動Ⅱ 3. 行動生態学における仮説の検証 4. 経済的な意思決定と個体Ⅰ 5. 経済的な意思決定と個体Ⅱ 6. 生息環境と社会構造Ⅰ 7. 生息環境と社会構造Ⅱ 8. 雌雄の対立と性淘汰Ⅰ 9. 雌雄の対立と性淘汰Ⅱ 10. 親による子の世話と配偶システムⅠ 11. 親による子の世話と配偶システムⅡ 12. 鳥類・哺乳類・魚類の協同と手伝いⅠ 13. 鳥類・哺乳類・魚類の協同と手伝いⅡ 14. 人間の行動生態学Ⅰ 15. 人間の行動生態学Ⅱ 				
評価方法	「ルーブリック」によって評価する。				
講義外での学習	講義中に次回までの課題を指示するので、それを行っておくこと。				
履修上の注意事項					
教材	<p>◆教科書：</p> <p>◆参考書：行動生態学（2015）NB デイビス、JK クレブス、SA ウェスト 人間の自然認知特性とコモنزの悲劇（2009）小林朋道</p>				

科目名	海洋微生物学特論	配当年次	1	単位数	2
科目区分	自然環境科目群	履修区分	選択		
教員名	吉永 郁生	開講区分	後期		
授業の概要	<p>キーワード： <u>ゲノミックス、遺伝子解析、海洋生物</u></p> <p>1990 年以降，科学の分野における情報解析技術の導入は著しい。微生物を含む海洋生物の生態研究においても例外ではなく，少なくとも環境に由来する遺伝子を最先端の情報技術を用いて解析することが望まれている。将来，環境アセスメントや環境管理の分野で専門家として活躍したい人材に求められる能力として，膨大なデータベースにアクセスして，そこに蓄えられている資料やツールを縦横に利用する技術は必須である。この科目では，環境科学分野の専門家育成のために，Microbial Ecology of the ocean (Wiley-Blackwell 刊) をテキストとして，海洋の微生物過程の詳細をゲノミックスやプロテオミックスなどのオミックスを利用する解析手法の基礎と応用を解説する。また，Genbank や KEGG を利用した実際の演習などを通して，海洋微生物に関わらず，さまざまな生物の多様性解析や進化の復元，遺伝子変異の検出法などの現代の最新の技術を身に付ける。</p>				
到達目標	<p>・ゲノム情報を利用した生物分類、系統関係の推測、代謝の推測の理論を十分に理解し、既存のデータベースをもとに解析し、その解析結果を説明できる。</p>				
授業計画	<ol style="list-style-type: none"> 1. ガイダンス 2. オミックス(ゲノミクス, プロテオミクス等)の基礎と応用 1 3. オミックス(ゲノミクス, プロテオミクス等)の基礎と応用 2 4. オミックス(ゲノミクス, プロテオミクス等)の基礎と応用 3 5. オミックス(ゲノミクス, プロテオミクス等)の基礎と応用 4 6. オミックス(ゲノミクス, プロテオミクス等)の基礎と応用 5 7. DDBJ や Genbank を利用した遺伝子データの検索と系統樹の作成 1 8. DDBJ や Genbank を利用した遺伝子データの検索と系統樹の作成 2 9. DDBJ や Genbank を利用した遺伝子データの検索と系統樹の作成 3 10. DDBJ や Genbank 等を利用した遺伝子データによる多様性解析 1 11. DDBJ や Genbank 等を利用した遺伝子データによる多様性解析 2 12. DDBJ や Genbank 等を利用した遺伝子データによる多様性解析 3 13. KEGG を利用した代謝過程の推測と復元 1 14. KEGG を利用した代謝過程の推測と復元 2 15. KEGG を利用した代謝過程の推測と復元 3 				
評価方法	講義中に随時行う口頭試問、討議 (70%) , レポート (30%)				
講義外での学習	必要に応じて行う。				
履修上の注意事項	外部のデータベースサーバ等にアクセスし、解析するためにコンピューターを持つてくること。				
教材	<p>◆教科書：新しい分子進化学入門 (宮田隆 編、講談社) ただし，必要なところをコピーしてもらいますので，購入する必要はありません。</p> <p>◆参考書：海の環境微生物学 改訂版 (石田祐三郎，杉田治男編，恒星社厚生閣) ・Process in Microbial Ecology (D. L. Kirchman, Oxford Univ. Press) ただし，必要なところをコピーしてもらいますので，購入する必要はありません。</p>				

科目名	水圏生物学特論	配当年次	1	単位数	2
科目区分	自然環境科目群	履修区分	選択		
教員名	太田太郎	開講区分	後期		
授業の概要	キーワード： 生理生態、増養殖、資源管理				
	<p>水圏生物は水産資源として利用されている種も多く、我々が将来直面する「食糧問題」を解決する上でも極めて重要である。水圏生物を持続的に利用する上で、その生物の生理学的特性及び生態学的特性を理解することは必要不可欠であり、さらにその応用として増養殖や資源管理の手法を検討していく必要がある。本講義では代表的な水圏生物の生理・生態を解説し、専門的な文献を購読することによりその利用のあり方について考えていく。</p>				
到達目標 (ルーブリック評価項目)	<ul style="list-style-type: none"> ・水圏生物の生理・生態的特性を理解する。 ・水圏生物の持続的な利用方法について考察する。 ・専門的な文献を読み、理解出来るようにする。 				
授業計画	<ol style="list-style-type: none"> 1. イントロダクション 2. 無脊椎動物の生理・生態Ⅰ（無脊椎動物） 3. 脊椎動物の生理・生態Ⅱ（脊椎動物：魚類） 4. 魚類の形態と分類 5. 魚類の成長と発育（仔稚魚の分類と種査定） 6. 水圏生物の資源変動Ⅰ（漁業生産と漁業技術） 7. 水圏生物の資源変動Ⅱ（加入量変動とレジームシフト） 8. 水圏生物の資源変動Ⅲ（成長解析の実践） 9. 水圏生物の増養殖Ⅰ（繁殖保護・環境改善） 10. 水圏生物の増養殖Ⅱ（栽培漁業） 11. 水圏生物の増養殖Ⅲ（養殖業） 12. 文献レビュー（受講生による課題発表） 13. 文献レビュー（受講生による課題発表） 14. 文献レビュー（受講生による課題発表） 15. 講義のまとめ 				
評価方法	ルーブリック（40%） 期末レポート（30%）及び課題発表と授業での参加態度（30%）により成績評価する。				
講義外での学習	文献レビュー（受講生による課題発表）では、レジメ及びプレゼンテーションの準備が必要です。				
履修上の注意事項	特になし				
教材	<p>◆教科書：講義内で配布します</p> <p>◆参考書： 会田勝美 編「水圏生物科学入門」 恒星社厚生閣 塚本勝巳 編「魚類生態学の基礎」 恒星社厚生閣</p>				

科目名	地形・地質学特論	配当年次	2	単位数	2
科目区分	自然環境科目群	履修区分	選択		
教員名	徳田 悠希	開講区分	前期		
授業の概要	<p>キーワード：第四紀 海水準変動 氷期・間氷期サイクル</p> <p>現在の自然環境は、約 260 万年前から現在にいたる地質時代である第四紀をとおして形成された。その形成過程つまり第四紀自然史について、判明している諸事実を各種文献から学習する。これにより、受講者は自然史の復元に必要なデータとはどのようなものか、その解析にはどのような手段があるのかを身に着ける。海外の教科書や国際誌に掲載された論文などの文献講読と講義を織り交ぜた授業となる。</p>				
到達目標	第四紀の地球環境変動を明らかにするためのデータ取得・解析手法を理解する				
授業計画	<p>第1～3回. 第四紀とは 第4～10回. 氷期・間氷期サイクル 第11～15回. 海水準変動と地形形成プロセス</p>				
評価方法	レポート（90%） ルーブリック（10%）				
講義外での学習	参考書を読み内容を理解する				
履修上の注意事項	<p>講義内容について不明な点があれば随時質問すること</p> <p>※先修科目：なし</p>				
教材	<p>◆教科書：</p> <p>◆参考書：John Lowe and Mike Walker. <i>Reconstructing Quaternary Environments 3rd edition</i>. London, 2014.</p>				

科目名	森林管理学特論	配当年次	1	単位数	2
科目区分	自然環境科目群	履修区分	選択		
教員名	根本 昌彦	開講区分	後期		
授業の概要	<p>キーワード： 森林保全 木材利用 公共政策</p> <p>森林は公共的な性格を有し、人々は森林から様々な便益（恵み）を受けて暮らしている。一方で、森林は特定の土地制度の下にあり、その便益が特定の個人やグループに帰属し、公共の利益との間に齟齬を来たす場合も起こる。森林が有する公共的な側面は、国や地域など地理的にみても性格が異なるし、あるいは同じ地域でも歴史的に変遷し、社会経済状況が異なれば求められる公共性も異なる。本講義では、世界的な視点から、森林に関わる土地制度を調べ、私的便益と公共性との関連を検証するとともに、求められる公共性を果たすための政策のあり方などについても考えてみたい。</p> <p>なお、専門の雑誌を講読しながら議論を進める。講義では関心をもったポイントについて議論しながら進める。</p>				
到達目標 (ルーブリック評価項目)	<ol style="list-style-type: none"> 1. 森林の私的な性格、公的な性格を併せて理解できるようにする。 2. 森林保全や木材利用などについて関心を深める。 3. 英文、和文を問わず、資料を読んで議論できるようにする。 				
授業計画	<ol style="list-style-type: none"> 1回 イントロ 概要説明 2回 森林の機能など 文献調査 3回 森林の公的役割 国際比較など 文献講読 4回 世界の森林概要と森林所有 FAO資料など 5回 具体的な国の選択と概要 文献調査 6回 具体的な国に関する議論（1） 7回 具体的な国に関する議論（2） 8回 具体的な国に関する議論（3） 9回 日本の森林制度の歴史 文献講読（1） 10回 日本の森林制度の歴史 文献講読（2） 11回 日本の森林制度の歴史 文献講読（3） 12回 コモンズ論と森林管理問題 文献講読（1） 13回 コモンズ論と森林管理問題 文献講読（2） 14回 公共政策としての森林政策 文献講読（1） 15回 公共政策としての森林政策 文献講読（2） 				
評価方法	授業で説明したことの確認と、授業で得た知識を基礎にして議論等に応用ができるかを確認する。ルーブリック（50%）、毎回の口頭での知識確認（30%）、期末レポート（20%）				
講義外での学習	授業中に講読すべき論文などを指示するので、それを読み、論点を抽出するように。				
履修上の注意事項	※先修科目：特になし。				
教材	<p>◆教科書：講義中に指示する。</p> <p>◆参考書：講義中に指示する。</p>				

科目名	生物有機化学特論	配当年次	1	単位数	2
科目区分	自然環境科目群	履修区分	選択		
教員名	佐藤 伸	開講区分	前期		
授業の概要	<p>キーワード： 代謝、生合成、バイオテクノロジー、酵素</p> <p>生物が織りなす生命活動は様々な有機物の複雑な化学反応の連続である。生物が引き起こす化学反応は主として代謝反応と呼ばれ、代謝は生物自身が分泌する酵素などの触媒を介して細胞内だけでなく細胞外でも引き起こされる。これらの生物代謝反応の結果生じた物質を適材適所に利用して命を営んでいる。本講義では生物の代謝メカニズムを有機化学的な視点で理解し、物質の持つ化学的性質や生物の化学反応を分析する方法なども紹介しながら、生物を分子レベルで深く理解することを目指します。</p>				
到達目標 (ルーブリック評価項目)	<ol style="list-style-type: none"> 1. 生物の生化学的な現象について有機化学反応と関連付けて考えることができる。 2. 物質の化学構造から化学反応の展開を議論する力がつく。 				
授業計画	<ol style="list-style-type: none"> 1. 生物有機化学序論 2. 炭水化物 3. 脂肪と脂肪酸 4. アミノ酸 5. ペプチド・タンパク質 6. 酵素と反応 7. 核酸 8. 微量必須成分 9. 光合成と糖代謝 10. 一次代謝と生合成 11. 二次代謝と生合成 (1) イソプレノイドの生合成 12. 二次代謝と生合成 (2) ポリケチド・フェニルプロパノイド等の生合成 13. 二次代謝と生合成 (3) 生理活性物質の機能 14. バイオテクノロジーと分子認識・人工酵素 15. 講義のまとめ 16. 試験 				
評価方法	教科書や配布テキストの事前事後学習の状況 (80%) と、最終試験 (20%) で評価します。				
講義外での学習	自己学習をしておくことが望ましい。				
履修上の注意事項	教科書や配布資料をよく読み、内容を理解すること。				
教材	<p>◆教科書：基本的にはプリントを配布するつもりですが、場合によっては教科書を指定可能性もあります。</p> <p>◆参考書：有機化学スタンダード 生物有機化学 (裳華房) ISBN978-4-7853-3425-3 Essential 細胞生物学原書第4版 (南江堂) ISBN978-4-524-26199-4 ストライヤー生化学第7版 (東京化学同人) ISBN978-4-8079-0803-5</p>				

科目名	土壌学特論	配当年次	1	単位数	2
科目区分	自然環境科目群	履修区分	選択		
教員名	角野 貴信	開講区分	後期		
授業の概要	<p>キーワード： 生物地球化学、持続可能性、生態系生態学</p> <p>生物の影響を受けた地殻の風化生成物である土壌は、水やエネルギーの流れと相互作用することにより、生態系内の物質動態においてその速度や反応過程を制御する効果を持つ。本講義では、主に海外の論文や教科書を題材に、環境中での土壌の役割や環境問題との関わりについて輪読形式で解説し、参加者全員で議論する。</p> <p>本講義により、土壌学における最新の研究成果に触れるとともに、土壌資源およびその持続的利用に関する基礎的な理解を深めることを目的とする。</p>				
到達目標 (ルーブリック評価項目)	<ol style="list-style-type: none"> 1. 土壌資源の持続的利用に関する基礎的な知識を体系的に習得し、最先端の知見を継続的に理解するために必要な技能を身に着ける。 2. 生態系の中で土壌が果たす役割や、環境問題と土壌との関りについて議論し、土壌に関する理解を深める。 				
授業計画	<ol style="list-style-type: none"> 1. 土壌とは 2. 土壌の化学1 (鉱物) 3. 土壌の化学2 (有機物) 4. 土壌の化学3 (吸着・交換・拡散二重層) 5. 土壌の化学4 (団粒) 6. 土壌の生物学1 (植生と土壌) 7. 土壌の生物学2 (土壌動物・微生物) 8. 土壌の物理学1 (熱・水の移動) 9. 土壌の物理学2 (コンシステンシー) 10. 土壌の生成と分類1 (土壌生成因子) 11. 土壌の生成と分類2 (日本と世界の土壌分類法) 12. 各論1 (植物栄養と土壌) 13. 各論2 (土壌汚染とその浄化) 14. 各論3 (地球温暖化と土壌) 15. 各論4 (砂漠化) 				
評価方法	ルーブリック (40%)、予習状況や授業への参加態度 (30%)、期末レポート (30%)				
講義外での学習	関連する内容についての文献を読むなど予習・復習を行うこと。				
履修上の注意事項	講義に対する積極的な参加を期待します。 ※先修科目：特になし				
教材	<p>◆教科書： なし (資料配布)</p> <p>◆参考書： N.C. Brady and R.R. Weil (2010) Elements of the Nature and Properties of Soils. Prentice Hall, Boston. など</p>				

科目名	局地気象学特論	配当年次	1	単位数	2
科目区分	自然環境科目群	履修区分	選択		
教員名	重田 祥範	開講区分	前期		
授業の概要	<p>キーワード： 大気境界層・都市熱環境・局地循環</p> <p>本講義は、局地気象学に重点を置いている。講義では、大気境界層内での大気現象について、地表面付近における熱収支から局地循環まで議論していく。また、後半では前半の講義で身につけた気象学の知識を生かし、都市や山地など様々なフィールドにて実際に気象観測をおこなう。</p>				
到達目標	気象学の応用的な知識を身につけた後、フィールドでの気象観測を通じて、局地循環などその形成メカニズムについて体験的に理解できるようになる。				
授業計画	<ul style="list-style-type: none"> ○第1章 大気境界層の気象 <ul style="list-style-type: none"> 第1回：大気境界層の構造 第2回：放射環境と大気の熱力学 第3回：乱流と地表面フラックス ○第2章 都市の大気熱環境 <ul style="list-style-type: none"> 第4回：都市気候と大気熱収支 第5回：都市の温熱環境と生気象 第6回：大気汚染 ○第3章 地形と局地気象 <ul style="list-style-type: none"> 第7回：冷気流と斜面温暖帯 第8回：冷気湖の生成と構造 第9回：地峡風の形成メカニズム ○第4章 局地気象の観測 <ul style="list-style-type: none"> 第10回：都市気象の実態調査① 第11回：都市気象の実態調査② 第12回：地峡風の観測① 第13回：地峡風の観測② 第14回；盆地霧の発生メカニズムと調査① 第15回：盆地霧の発生メカニズムと調査② 				
評価方法	レポートならびに自然観察に対する取り組み方で評価する。 ルーブリック（40%）、小レポート（40%）、定期試験（20%）				
講義外での学習	天気図や気象衛星画像など気象情報を確認すること。				
履修上の注意事項	本講義では、履修者の専攻および希望により、野外での実習を含めた第1～4章の選択正式でおこなう。希望者は事前に相談することが望ましい。				
教材	<p>◆教科書：適宜プリント等を配布する。</p> <p>◆参考書：一般気象学，小倉義光 著，東京大学出版会， ISBN4-13-062706-6 局地気象学，堀口郁夫・小林哲夫・塚本修・大槻恭一，森北出版株式会社， ISBN4-627-94681-3</p>				

科目名	廃棄物政策学特論	配当年次	1	単位数	2
科目区分	資源循環科目群	履修区分	選択		
教員名	門木 秀幸	開講区分	前期		
授業の概要	<p>キーワード： 循環型社会、廃棄物、リサイクル</p> <p>持続可能な循環型社会への転換を進めるためには、廃棄物の適正な処理・処分や3Rを推進するための廃棄物政策が重要となる。本授業では、廃棄物処理法の制度、リサイクル関連法の制度を学び、循環型社会の構築のための社会制度やその課題について理解を深める。また、熱処理技術、最終処分技術について、技術的な理解を進めるとともに、リサイクル製品の需要拡大の政策や災害廃棄物対策等の新たな政策を学ぶことで、より多面的な視点から、課題解決のための手法を学ぶ。</p>				
到達目標 (ルーブリック評価項目)	<ol style="list-style-type: none"> 1. 循環型社会に関する法制度を中心とした社会制度を理解し、その目的や課題について理解を深める。 2. 循環型社会に関する論文等を正確に読むことができる。 				
授業計画	<p>以下のテーマに沿って授業を進めることとする。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 廃棄物処理法の概要 2. 廃棄物処理法の制度：不適正処理対策 3. 廃棄物処理法の制度：処理施設の許可制度 4. 熱処理技術 5. 最終処分技術 6. 有害物質管理 7. 廃棄物の試験法 8. 災害廃棄物対策 9. リサイクル制度：容器包装 10. リサイクル制度：自動車 11. リサイクル制度：小型家電 12. リサイクル制度：家電リサイクル 13. リサイクル制度：食品廃棄物 14. リサイクル制度：建設廃棄物 15. リサイクル製品の需要促進 				
評価方法	<p>講義中に出示された課題に関するレポートを提出する。また、内容の理解を確認するための面談・試問を行って、両者の結果により成績評価を行う。 ルーブリック（50%）、レポート（50%）</p>				
講義外での学習	<p>事前に配布した文献を読んで、予習をしておくこと。</p>				
履修上の注意事項	<p>授業計画は変更になることがあるので、連絡事項に注意すること。</p> <p>※先修科目：</p>				
教材	<p>◆教科書： 廃棄物資源循環学会誌などの専門分野学会誌より関係資料を抜粋して配布予定とする。</p> <p>◆参考書： 講義の中で紹介します。</p>				

科目名	廃棄物工学特論	配当年次	1	単位数	2
科目区分	資源循環科目群	履修区分	選択		
教員名	金 相烈	開講区分	後期		
授業の概要	<p>キーワード： 燃焼工学、リサイクル技術、埋立処分</p> <p>廃棄物問題は、我々の生活に直接関係した一番身近な環境問題であり、資源の枯渇や地球温暖化など地球環境問題でもある。本講義では、環境保全、資源保全、エネルギー確保を廃棄物の観点から工学的役割について学ぶ。講義の内容としては、リサイクルと適正処理技術のほか、様々な廃棄物処理に伴う「リスク」の評価手法とリスク管理、および住民との合意形成技術（リスクコミュニケーション）など、技術的・社会的側面から廃棄物の問題を理解し、その解決策を自ら提案できるようにする。</p>				
到達目標 (ルーブリック評価項目)	<p>廃棄物の一連の処理過程を理解し、各要素技術の原理、現状、課題等を説明することができる。</p>				
授業計画	<ol style="list-style-type: none"> 1. 循環型社会形成の背景と理論 2. 循環・適正処分のための法律 3. 循環・適正処分の現状 4. 廃棄物の分析・測定 5. 燃焼工学の基礎 6. 燃焼装置・公害対策 7. 有機物系廃棄物のリサイクル 8. 粗大ごみの処理、破碎、選別 9. 廃棄物の埋立1 10. 廃棄物の埋立2 11. 有害廃棄物の管理と適正処分 12. ライフサイクルアセスメント（LCA）の考え方とその方法 13. 不法投棄問題とリスクコミュニケーション 14. 課題発表・討論 15. 理解度の確認 				
評価方法	<p>ルーブリック：50%、定期試験：30%、小レポート（20%）</p>				
講義外での学習	<p>講義中にあげた関連論文を自ら探して読むこと</p>				
履修上の注意事項	<p>※先修科目：履修にあたって、「廃棄物政策学特論」を修得しておくことが望ましい。</p>				
教材	<p>◆教科書：田中信寿編著「リサイクル・適正処分のための廃棄物工学の基礎知識」（技報堂出版）ISBN4-7655-3189-9C3051</p> <p>◆参考書：田中勝編著：「循環型社会への処方箋」（中央規定）ISBN978-4-8058-4722-0 平川秀幸など「リスクコミュニケーション論」（大阪大学出版会）ISBN978-4-87259-284-9</p>				

科目名	衛生工学特論	配当年次	1	単位数	2
科目区分	資源循環科目群	履修区分	選択		
教員名	甲田 紫乃	開講区分	前期		
授業の概要	<p>キーワード： 環境衛生工学、大気汚染、水質汚濁</p> <p>講義形式と演習形式を併用し、大気汚染、水質汚濁に関する理解を深め、それらの防止技術・対策の全体像、原理の要点を理解することを目標とする。さらに、我々人間の環境を保全するにはどうすれば良いのかについて、昨今の研究の潮流を踏まえつつ、知見を広げていく。</p>				
到達目標 (ループリック評価項目)	<ol style="list-style-type: none"> 1. 環境衛生工学の観点から、大気汚染についての専門的な基礎知識を理解する。 2. 環境衛生工学の観点から、水質汚濁についての専門的な基礎知識を理解する。 3. 大気汚染及び水質汚濁に関する昨今の研究や技術・対策の潮流について、知見を深める。 				
授業計画	<ol style="list-style-type: none"> 1. イントロダクション 2. 衛生工学の歴史 3. 大気汚染の概要 4. 大気汚染物質 5. 燃料の燃焼計算 6. 大気汚染の影響（1）—生態系— 7. 大気汚染の影響（2）—人体— 8. 大気汚染防止技術・対策 9. 大気汚染防止技術・対策の昨今の潮流 10. 水質汚濁の概要 <ol style="list-style-type: none"> 11. 水質汚濁物とその発生源 12. 水質汚濁の影響（1）—生態系— 13. 水質汚濁の影響（2）—人体— 14. 水質汚濁防止技術・対策 15. 水質汚濁防止技術・対策の昨今の潮流 				
評価方法	<p>発表（発表回数は受講者数を鑑みて決定）及び課題提出を総合して評価する。 ループリック（20%）、発表（40%）、課題提出（40%） ※ループリック評価：到達目標に関する理解度、授業参加態度・修学意欲</p>				
講義外での学習	<p>随時関心を持った事項に関しては本などで知識を深め、講義で扱った用語などの理解を深めること。</p>				
履修上の注意事項	<p>化学の基礎知識を持っていることが望ましい。</p>				
教材	<p>◆教科書：特に指定しない。必要に応じて教員作成による講義資料を配布する。 ◆参考書：「環境衛生工学」 津野洋、西田薫 共立出版（株）</p>				

科目名	温暖化対策エネルギー技術特論	配当年次	1	単位数	2
科目区分	資源循環科目群	履修区分	選択		
教員名	田島 正喜	開講区分	後期		
授業の概要	<p>キーワード： 地球温暖化、環境・エネルギー、地域エネルギーシステム</p> <p>近年喫緊の課題となっている地球温暖化に関して、その原因、影響、対策の観点で考察する。特に対策に関して、将来のエネルギー利活用システムをどのように変革していく必要があるか、バイオマスや太陽光、風力発電といった再生可能エネルギーの利活用、原子力発電への取り組みスタンス等 1 次エネルギーの利用から、将来進展が期待される水素エネルギー等の 2 次エネルギーシステムまで、幅広く検討し解説していく。加えて、究極のエネルギーシステムであるゼロエミッション社会構築の可能性についても考察する。</p>				
到達目標 (ルーブリック評価項目)	<ul style="list-style-type: none"> ・地球温暖化の原因・影響・対策についての知識を得るとともに、理解する。 ・温暖化対策として必要な技術システムを理解し、将来のエネルギーシステムにつき独自で構想できる。 				
授業計画	<ol style="list-style-type: none"> 1. 地球温暖化とは 2. 資源制約と環境制約 3. 1 次エネルギー利用の変遷と将来エネルギーの展望 4. 環境制約とは、IPCC 第 4 次および 5 次評価報告書、COP 会合、京都議定書、パリ協定の意味するところ 5. 世界のエネルギー利用の実態、先進国と開発途上国との確執 6. 日本における既存エネルギーシステム（電気、ガス） 7. 電気、ガス事業の自由化の流れと将来エネルギーの可能性 8. 原子力発電の将来構想 9. 再生可能エネルギーのポテンシャル 10. 将来の 2 次エネルギーシステム、2 次エネルギーと 1.5 次エネルギー 11. 水素エネルギーとは、可能性と特徴 12. 次世代自動車の方向性 13. 分散型エネルギーによる地域エネルギーシステム構築 14. CO2 削減システム：CCS、BECCS（Bioenergy with CCS、^{ネガティブ}エミッション） 15. ゼロエミッション社会の可能性と課題 <p>上記トピックスの講義順や内容等は、適宜変更することもある。</p>				
評価方法	授業態度および期末に実施するレポートにて評価する。授業態度及びルーブリック（20%）、レポート（80%）				
講義外での学習	教材としてあげた本を読み内容を把握するとともに環境・エネルギー分野における課題を整理すること。				
履修上の注意事項	日々報道等で得られる環境・エネルギー分野の情報に敏感に接する事。またこれら情報についての自分なりの考え方を醸成する必要がある。 ※先修科目：履修にあたっての条件はない。				
教材	<p>◆教科書：別途指定、あるいは講義内容のレジюмеを提供する。</p> <p>◆参考書：住明正、「さらに進む地球温暖化」、ウエッジ選書 ウォレス・S・ブロッカー、ロバート・クンジング、「CO2 と温暖化の正体」、河出書房新社 ジェレミー・リフキン、「水素エコノミー」、NHK 出版 最首公司、「水素社会宣言」、エネルギーフォーラム 山地憲治、「エネルギー・環境・経済システム論」、岩波書店 大島堅一、「再生可能エネルギーの政治経済学」、東洋経済新報社</p>				

科目名	環境分析化学特論	配当年次	1	単位数	2
科目区分	資源循環科目群	履修区分	選択		
教員名	山本 敦史	開講区分	後期		
授業の概要	<p>キーワード：化学測定と不確かさ、統計学、分離分析、分光分析、質量分析</p> <p>自然環境における物質の挙動を理解するために、様々な分析化学的手法が持ちられている。どのような媒体・物質を調査対象にするかに応じて用いられる手法を選択する必要がある。また、それぞれの手法にはより得られた結果には不確かさが含まれる。不確かさを踏まえ結果から何かを言うために、結果をどのように解析するのかについても取り上げる。</p>				
到達目標 (ルーブリック評価項目)	<ol style="list-style-type: none"> 1. 自らが取り組む研究課題に関連する化学分析についてその原理的な背景から学び、研究課題に対して新たな観点が追加できるようにする。 2. データから結論を導くために、データを得る手法に何が求められるかについて理解し、研究計画の堅牢性を向上させる。 				
授業計画	<ol style="list-style-type: none"> 1. ガイダンス：データを得るということについて、分析化学の一例を用いて考察する。 2. 化学分析を行う上でのルール：次元や桁の違いを正しく処理する重要性について。 3. 分析の手順：要求される実験の精度と基本的な実験操作について。 4. 精密な分析の世界：分析技術の進歩と得られる情報量の変化をどのように使いこなすか。用語を十分に整理して理解していくことの重要性を学ぶ。 5. 分析データの取り扱い：「不確かさ」を考える。 6. データの評価・比較：統計的手法を用いたデータの処理について。 7. 品質保証と検量線：検量線に用いるモデルの前提と残差チェックを通じた診断。 8. 分光学的手法とその原理：光と化学物質の相互作用を基礎に立ち返り考える。 9. 分光学的手法とその応用：物質を検出するための工夫。選択性と効率。 <p>以下は履修者の希望に合わせて選択する。</p> <p>A1. 分光分析装置の実際：光源から検出まで機器のデザインとその意味について学ぶ。</p> <p>A2. 原子分光法：誘導結合プラズマ、蛍光 X 線。</p> <p>B1. 分離分析：クロマトグラフィーの原理。良好な分離を得るために考えること。分離性能を評価する。</p> <p>B2. ガスクロマトグラフィー：高い信頼性と分離能がなぜ得られるか。</p> <p>B3. 液体クロマトグラフィー：分離機構の多様性について。</p> <p>B4. クロマトグラフィーと他の技術のハイフネーション：技術の相性。</p> <p>C1. 質量分析法：質量分析の概要について。</p> <p>C2. 質量分析におけるイオン化：低分子から高分子までそれぞれ最適なイオン化とは。</p> <p>C3. 質量分離の原理：磁場型、四重極型、イオントラップ型、飛行時間型など目的に合わせた分離法の選択法。</p> <p>D1. 試料の前処理、抽出・精製：実際に用いられている均一化、抽出、精製を学ぶ。</p>				
評価方法	ルーブリック (50%) およびレポート (50%) により評価する。				
講義外での学習					
履修上の注意事項	※先修科目：履修にあたって、「***」を修得しておくことが望ましい。				
教材	<p>◆教科書：適宜資料・文献等を配布する。</p> <p>◆参考書：ハリス分析化学 D. C. Harris 著 化学同人 環境分析化学 合原眞ら 共著 三共出版</p>				

科目名	水環境技術特論	配当年次	1	単位数	2
科目区分	資源循環科目群	履修区分	選択		
教員名	戸苺 丈仁	開講区分	後期		
授業の概要	<p>キーワード： 水処理，水再利用，水インフラ</p> <p>水の再利用で重要な処理技術，再利用用途の概要，再利用計画策定と実施に関する考え方および水再利用インフラについて学ぶ</p>				
到達目標 (ルーブリック評価項目)	<ol style="list-style-type: none"> 1. 水再利用に関する主要な処理方法について工学的な観点から原理や設計の考え方を理解する 2. 水再利用に影響を与える重要な考慮事項について理解する 				
授業計画	<ol style="list-style-type: none"> 1. 水再生と再利用の現況・役割・課題 2. 下水の特性と健康・環境問題 3. 水の再生技術の概要 4. 二次処理による汚濁成分除去 5. 残存浮遊物質の除去 6. 膜処理による溶存成分の除去 7. 残留微量成分の除去 8. 消毒 9. 水再利用のためのサテライト処理 10. 排水再利用のためのオンサイト分散型システム 11. 再生水の供給と貯留 12. 水の再利用用途の概要 13. 再生水の農業利用 14. 再生水の工業利用，修景用灌漑 15. 水再利用計画の展望 				
評価方法	ルーブリック（20％），課題（80％）				
講義外での学習	講義中に課題を課します。				
履修上の注意事項	水処理，水質に関する基礎的な知識が必要です。 履修にあたっては，水処理，水質に関する基礎的な知識を習得しておくこと。				
教材	<p>◆教科書： 特になし，資料配布予定</p> <p>◆参考書： 講義の中で紹介します。</p>				

科目名	景観プランニング	配当年次	1	単位数	2
科目区分	人間環境科目群	履修区分	選択		
教員名	中橋 文夫	開講区分	後期		
授業の概要	<p>キーワード： ランドスケープ グリーンインフラ 国土</p> <p>景観は自然・社会・人文などに大別されることから、はじめに、それぞれのプランニングの考え方を示す。次に計画の骨子となる国土構造と流域景観について論じる。人口減少の時代に突入し、自然災害が頻発する今日、景観に何が求められるのか検証する。国はグリーンインフラストラクチャーという新たな概念を打ち出した。これを受けて、道路、広場、公園などの緑とオープンスペースのあり方を論じ、社会資本としての景観のあるべき姿を概説する。</p>				
到達目標 (ルーブリック評価項目)	<p>景観の種類・構造・計画・法律などを学び、都市計画における景観の基本的な知識が備わる。とりわけ、人口減少・災害多発・少子高齢化などの時代を迎え、私たちの生活環境が激変している。そのような時代において、都市構造はコンパクトシティ、集中と選択、国土強靱化などについて問われるが、今後の景観のあるべき姿について学ぶことが出来る。将来、都市計画系のコンサルタントを希望する学生のウォーミングアップになりうる。</p>				
授業計画	<ol style="list-style-type: none"> 1. イントロダクション 2. 景観プランニングの概念と領域 3. 国土構造と流域景観 4. 都市計画と景観 5. 自然景観 6. 人文景観 7. 社会景観 8. 文化的景観 9. 市街地景観 10. 道路景観 11. 公園景観 12. 庭園景観 13. 防災景観 14. 景観プランニングの実践 15. 論文執筆 				
評価方法	ルーブリック(20%)、議論の内容(50%)、論文(30%)について評価する。				
講義外での学習	日頃から身の回りの景観を意識して観察分析する。				
履修上の注意事項	※先修科目：履修にあたって学部授業の「都市の自然環境」「景観計画」「グリーンデザイン」を履修しておくことが望ましい。				
教材	<p>◆教科書：適宜レジュメを配す</p> <p>◆参考書：拙著 「緑のプレゼンテクニック」(学芸出版) 江山正美 「スケープテクチュア」(鹿島出版会) B・ハケット「ランドスケープ・プランニング」(鹿島出版会)</p>				

科目名	歴史遺産保全特論	配当年次	1	単位数	2
科目区分	人間環境科目群	履修区分	選択		
教員名	浅川 滋男	開講区分	前期		
授業の概要	<p>キーワード： 住環境保全 文化遺産 歴史的景観 過疎</p> <p>文化遺産／歴史的環境の保全に係る文献を講読します。文献はその年のトピックに係る題材を選びます。今年度は首里城炎上（2019年10月末）の問題に注目し、文化遺産と火災、火災後の復元（再建）を主題にしようと思います。まず思い浮かぶのは昭和24年（1949）の法隆寺金堂火災です。解体修理中に1階の木造部分と壁画が被災し、今の法隆寺金堂1階は昭和50年代に復元された新しい木造建築であることを知る人は少ないかもしれません。翌年（1950）、金閣寺が全焼します。これは若き修行僧（大学生）の放火による火災であり、三島由紀夫、水上勉という昭和の大作家が小説の主題としました。いずれ劣らぬ傑作と言われています。今回、改めて金閣寺放火について学び、その社会的背景、犯罪の心理を理解するとともに、文化財保護制度への影響を考えてみようと思います。</p>				
到達目標 (ルーブリック評価項目)	<p>三島の『金閣寺』を原作小説と映画で鑑賞しつつ、遅れて同じ主題を取り上げた水上の『五番町夕霧楼』『金閣炎上』を併読し、若き修行僧がなした「放火」行為の社会的背景（天皇制解体→民主化）、日本美に対する意識を理解する。</p>				
授業計画	<ol style="list-style-type: none"> 1. オリエンテーション 2. 映画『炎上』（市川崑監督・市川雷蔵主演）鑑賞 3. 三島由紀夫『金閣寺』[1956]を読む（1） 4. 同上（2） 5. 同上（3） 6. 同上（4） 7. 映画『金閣寺』（高林陽一監督・篠田三郎主演）鑑賞 8. 水上勉『五番町夕霧楼』[1963]を読む（1） 9. 同上（2） 10. 水上勉『金閣炎上』[1979]を読む（1） 11. 同上（2） 12. 同上（3） 13. 酒井順子『金閣寺の燃やし方』[2014]を読む（1） 14. 同上（2） 15. 考察および長文レポート 				
評価方法	<p>上記テキストの理解度、考察のレベルを総合的に評価します。 定期試験はありません。</p>				
講義外での学習	<p>本を読む習慣をつけましょう。</p>				
履修上の注意事項	<p>文庫本を貸与するので、読んでおきましょう。希望があれば、京都まで行って金閣を参拝することも可能です（その場合、2コマ相当とします）</p>				
教材	<p>◆教科書：三島由紀夫『金閣寺』[1956] 水上勉『金閣炎上』[1979] ◆参考書：水上勉『五番町夕霧楼』[1963] 酒井順子『金閣寺の燃やし方』[2014]</p>				

科目名	文化地理学特論	配当年次	1	単位数	2
科目区分	人間環境科目群	履修区分	選択		
教員名	柚洞一央	開講区分	前期		
授業の概要	<p>キーワード：場所 景観 自然 文化</p> <ul style="list-style-type: none"> ・最近の文化地理学理論について学ぶ。 ・文化地理学における重要概念について、学史的背景を踏まえて理解する。 				
到達目標 (ルーブリック評価項目)	<ul style="list-style-type: none"> ・理論や思想にとどまらず、常に、実際の社会における出来事と結び付けながら議論することをめざす。 				
授業計画	<ol style="list-style-type: none"> 1. オリエンテーション 2. 文化地理学の遺産 3. さまざまな問題と代替案 4. 文化とイデオロギー 5. 民衆文化と階級の政治力学 6. ジェンダーと性意識 7. 人種差別の言語 8. 言語の政治力学 9. 国家／民族建設と地政学 10. 建造環境 11. 場所と意味 12. モダニティと近代化 13. 境界を越えて 14. 文化地理学の課題 15. まとめ 				
評価方法	<p>講義で説明した内容の理解の程度、基礎的知識を正しく理解しているかどうかに重点をおく。 小レポート（50%）、ルーブリック（50%）</p>				
講義外での学習	<p>講義中にあげた文献を、最低一冊は読むこと。</p>				
履修上の注意事項	<p>ゼミ形式により展開する。 議論することを重視する。</p>				
教材	<p>◆教科書： ◆参考書：文化地理学の再構築（P. ジャクソン著 徳久球雄、吉富亨訳 玉川大学出版部 ISBN 9784472400315） 近現代の空間を読み解く（ジョン モリッシー、デヴィッド ナリー、ウルフ ストロメイヤー、イヴォンヌ ウィーラン 著 上杉和央 監訳 古今書院 ISBN 9784772231848）</p>				

科目名	都市計画学特論	配当年次	1	単位数	2
科目区分	人間環境科目群	履修区分	選択		
教員名	張 漢賢	開講区分	後期		
授業の概要	<p>キーワード： 計画論、多様性、持続性</p> <p>都市は、居住、生産、余暇、文化などの社会・経済活動の所産であり、これらの活動を支える存在でもある。多様な生活者が負担可能なかたちとして構築されなければならない生活空間・システム、それらを共有し、その公益性を最大限に生かし生活者に還元するのが都市の役割である。人口が急増しているなか、都市化がますます進行している地球において、受け皿として、これまでと異なった方法論やソリューションが求められている。都市の形成・変化に対応し、諸計画手法がさまざまな形で応用され、再考されている。この講義では、都市の計画思潮、形成手法の諸モデルを深化した視点でテキストを読み、都市の持続的な発展を可能にした諸システムを考察し、都市生活環境を維持・形成するための新しい計画手法を導く基礎的なパラダイムを探求する。</p>				
到達目標 (ルーブリック評価項目)	<ol style="list-style-type: none"> 1. 予習した内容を、基礎知識として理解する 2. その内容は、どのような背景または問題の所在に論が立てられたかを理解する 3. 都市計画論に一般化する際の着想力を獲得する 				
授業計画	<p>次のテキストを中心に学習する。履修者には毎回、文献で予習し、論点を整理し文章化する必要がある（文献の一部和訳あり）。</p> <p><u>都市計画における持続性概念の起源</u></p> <ol style="list-style-type: none"> 1. E. Howard, <i>The Three Magnets and The Town-Country Magnet</i>, 1898 2-3. L. Mumford, <i>Cities and the Crisis of Civilization</i>, 1938 4-5. A. Leopold, <i>The Land Ethic</i>, 1949 6. J. Jacobs, <i>Orthodox Planning and the North End</i>, 1961 7. D.H. Meadows et al., <i>Perspectives, Problems, and Models</i>, 1972 8-9. D. Harvey, <i>On Planning the Ideology of Planning</i>, 1985 <p><u>土地利用と都市デザイン</u></p> <ol style="list-style-type: none"> 10. J. Gehl, <i>Outdoor Space and Outdoor Activities</i>, 1980 11. R. Ewing et al., <i>Compactness vs. Sprawl</i>, 2011 <p><u>社会公正と環境的正義</u></p> <ol style="list-style-type: none"> 12. J.E. Perlman, M. Sheehan, <i>Fighting Poverty and Environmental Injustice in Cities</i>, 2007 13. M. Burayidi, <i>Urban Planning as a Multicultural Canon</i>, 2000 14. R.B. Beauregard, <i>Neither Embedded nor Embodied: Critical Pragmatism and Identity Politics</i>, 2000 <p><u>持続性計画とそのツール</u></p> <ol style="list-style-type: none"> 15. T. Beatley, <i>Planning for Sustainability in European Cities: A Review of Practice in Leading Cities</i>, 2013 				
評価方法	ルーブリック（80%）、最終レポート（20%）				
講義外での学習	講義外に担当分の発表準備が必要。発表者以外は、議論に参加するための予習が必要。				
履修上の注意事項	履修を希望する場合、履修登録する前に担当教員に内容を確認すること。（4416 教員研究室、shyan@kankyo-u.ac.jp） ※先修科目： 特になし				
教材	<p>◆教科書： 指定なし</p> <p>◆参考書：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) Stephen M. Wheeler and Timothy Beatley, <i>The Sustainable Urban Development Reader</i>, Routledge, 2009 / 2014 2) Scott Campbell and Susan S. Fainstein, <i>Readings in Planning Theory</i>, Blackwell, 1996 3) Michael A. Burayidi, <i>Urban Planning in a Multicultural Society</i>, Praeger, 2000 				

科目名	居住安全学特論	配当年次	2	単位数	2
科目区分	人間環境科目群	履修区分	選択		
教員名	中治弘行	開講区分	前期		
授業の概要	<p>キーワード： 木質構造 耐震性能 限界耐力計算</p> <p>講義では、限界耐力計算による木造建物の耐震設計について、前提となる振動論から始めて、2階建て木造住宅の限界耐力計算ができることを目指す。 授業は講義中心に行うが、授業内容に即した宿題・課題を出し、それらを通して理解を深めていく。</p>				
到達目標 (ルーブリック評価項目)	<ol style="list-style-type: none"> 1. 建築振動論に関する力学的、数学的取り扱いに関する基礎知識を身につける。 2. 2階建て木造住宅の限界耐力計算方法を理解する。 				
授業計画	<ol style="list-style-type: none"> 1. オリエンテーション：授業で扱う内容について実例を挙げながら紹介する。 2. 減衰のない1質点系の自由振動 3. 減衰のある1質点系の自由振動 4. 1質点系の強制振動(1) 周期的な強制外力の場合 5. 1質点系の強制振動(2) 周期的な地動の場合 6. 1質点系の強制振動(3) ランダムな地動の場合 7. 地震応答と応答スペクトル 8. 非線形振動と減衰 9. 多質点系の振動(1) 運動方程式と固有モード 10. 多質点系の振動(2) 線形応答 11. 木造建物の地震被害と振動特性 12. 限界耐力計算の考え方(1) 応答スペクトル 13. 限界耐力計算の考え方(2) 多質点系の1質点系への縮約 14. 限界耐力計算例(1) 平屋建ての場合 15. 限界耐力計算例(2) 2階建ての場合 16. 定期試験（またはレポート課題） 				
評価方法	<p>講義で説明した限界耐力計算法の内容の理解の程度、建築振動論に関する基礎的知識を理解しているかどうかを評価する。 ルーブリック評価（30%）、期末試験（70%） ※ルーブリック評価：到達目標に関する理解度、授業参加態度・修学意欲</p>				
講義外での学習	<p>講義中にあげた文献を、一冊でも良いので読むこと。また、講義の最初に前回授業内容に係る小テストを実施する場合もあるので、復習をしておくこと。</p>				
履修上の注意事項	<p>電卓を毎回必ず持参すること（関数電卓の方が望ましい）。また、ウェブ上に公開される講義資料を使用する回もあるため、パソコンを持参すること。 ※先修科目：履修にあたって、「木質構造計画」を修得しておくことが望ましい。</p>				
教材	<p>◆教科書：最新耐震構造解析(第3版) (柴田明德、森北出版、ISBN-10: 462752093X) 伝統的構法のための木造耐震設計法：石場建てを含む木造建築物の耐震設計・耐震補強マニュアル (伝統的構法木造建築物設計マニュアル編集委員会、学芸出版社、ISBN-10: 476154094X)</p> <p>◆参考書：伝統構法を生かす木造耐震設計マニュアル—限界耐力計算による耐震設計・耐震補強設計法 (木造軸組構法建物の耐震設計マニュアル編集委員会、学芸出版社、ISBN-10: 4761540753)</p>				

科目名	生活デザイン特論	配当年次	1	単位数	2
科目区分	人間環境科目群	履修区分	選択		
教員名	遠藤 由美子	開講区分	前期		
授業の概要	<p>キーワード： 建築・インテリアデザイン プロダクツデザイン</p> <p>商品や生活情報があふれる現代において、何を選びどのように暮らすのかは個人的な生活演出だけでなく環境的・社会的な意味をもつ。この講座では、暮らしの周辺にある日常的な家具や日用品、舗設（しつらい）に見られるデザインをとりあげ、人間工学的な検証と同時に感性からの検証を行い、デザインとは何か、また、感性とはどのような背景によって形成されるかを考える。</p>				
到達目標 (ルーブリック評価項目)	<p>1. デザインの意味するところを理解する。 2. 生活デザインの歴史を学ぶことで、デザインがどのように様式美につながってきたのか、また、デザインの本質とは何かを捉えることができる。</p>				
授業計画	<p>1. オリエンテーション：デザインとは何か、そのプロセスを示しながら解説する。 2. 生活デザインの歴史 ・ 近代ヨーロッパの社会変革期と生活具のあり方 ・ 日本の社会変革期と生活具の在り方について解説。 3. 「座る形」を中心に、様式美と身体的背景の関連性を解説。 (小レポート出題) 4. 日本人の生活空間の歴史と家具を考える。 5. 「マナーと躰、価値観の変化」を中心に様式美と社会的背景を解説。 (小レポート出題) 6. 日本人のライフスタイルと家具について考える。 7. 「きものマインドとデザイン」を中心に、様式美と文化的背景を解説。 (小レポート出題) 8. 「デザインにおける日本人らしさ」を考える。 (服飾・プロダクツ ・ 建築インテリアほか) 9. 日本の居住空間の歴史を解説。(小レポート出題) 10. 生活空間構成の決定要素について考える。 11. 家族の関係と距離感・空間について解説。 12. 住まいの広さ(歴史的視点と個人的視点による)について解説。(小レポート出題) 13. 究極の狭小住宅の例に見られる住まいの哲学。 14. 「豊かな住まい」とは何かを考える。(小レポート出題) 15. 地域性と住まいを解説。</p>				
評価方法	<p>デザインの意味を理解したか、時代や地域によって異なる様式にはどこにデザインの本質があるのか捉えることができたかを、各テーマで出題する小レポートをもって評価。 (100%)</p>				
講義外での学習	<p>講義の内容に関連した小レポートを出題するので、文献の関連部分をしっかりと読み、自分なりの見解を述べられるように学習する。</p>				
履修上の注意事項	<p>人間環境科目群の科目を、既にあるいは同時に履修すること。 ※先修科目：特になし</p>				
教材	<p>◆教科書： ◆参考書：「椅子と日本人のからだ」矢田部英正著、「きものマインド」バーナード・ルドルフキー著ほか</p>				